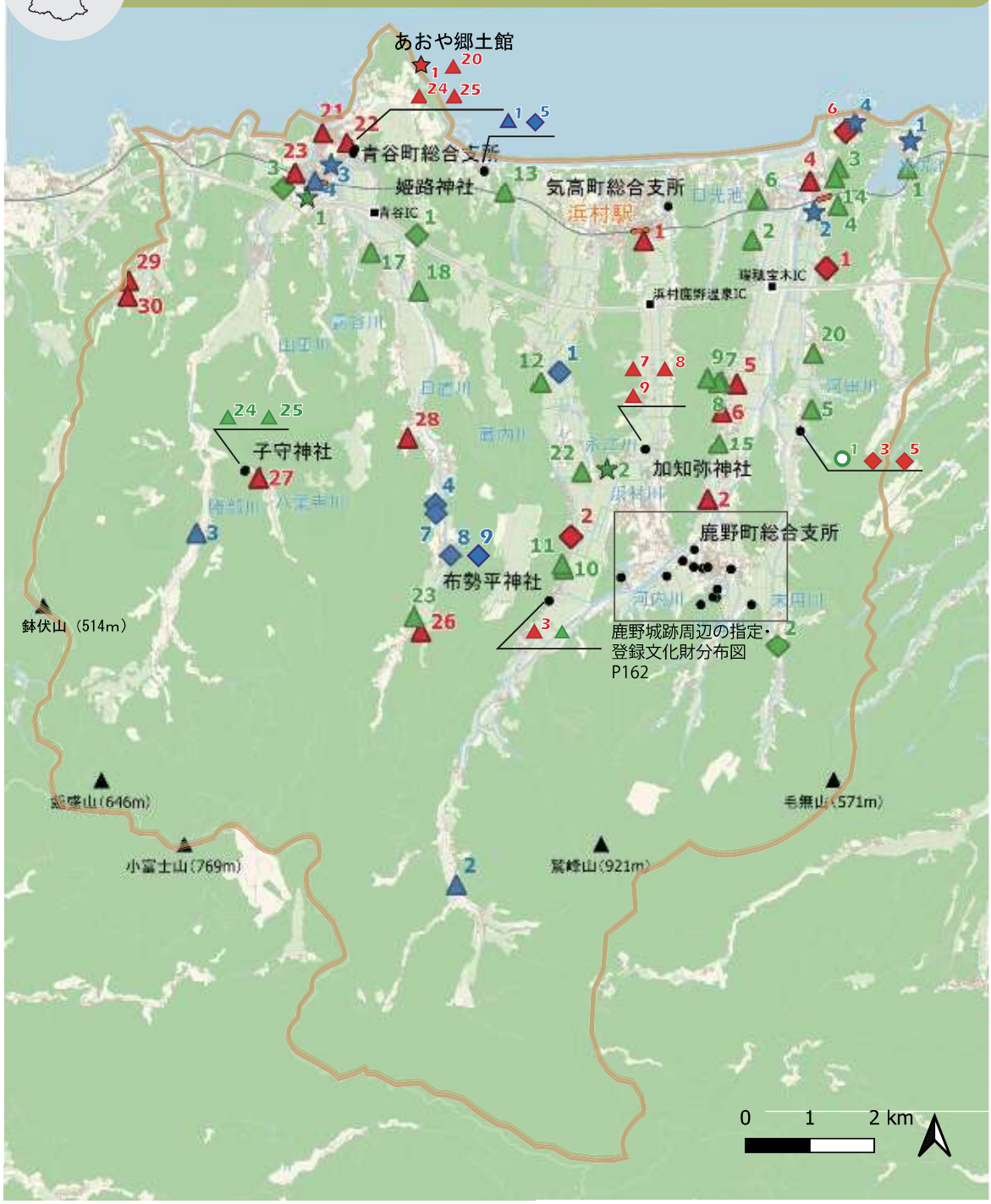
⑤ 鷲峰山麓地域

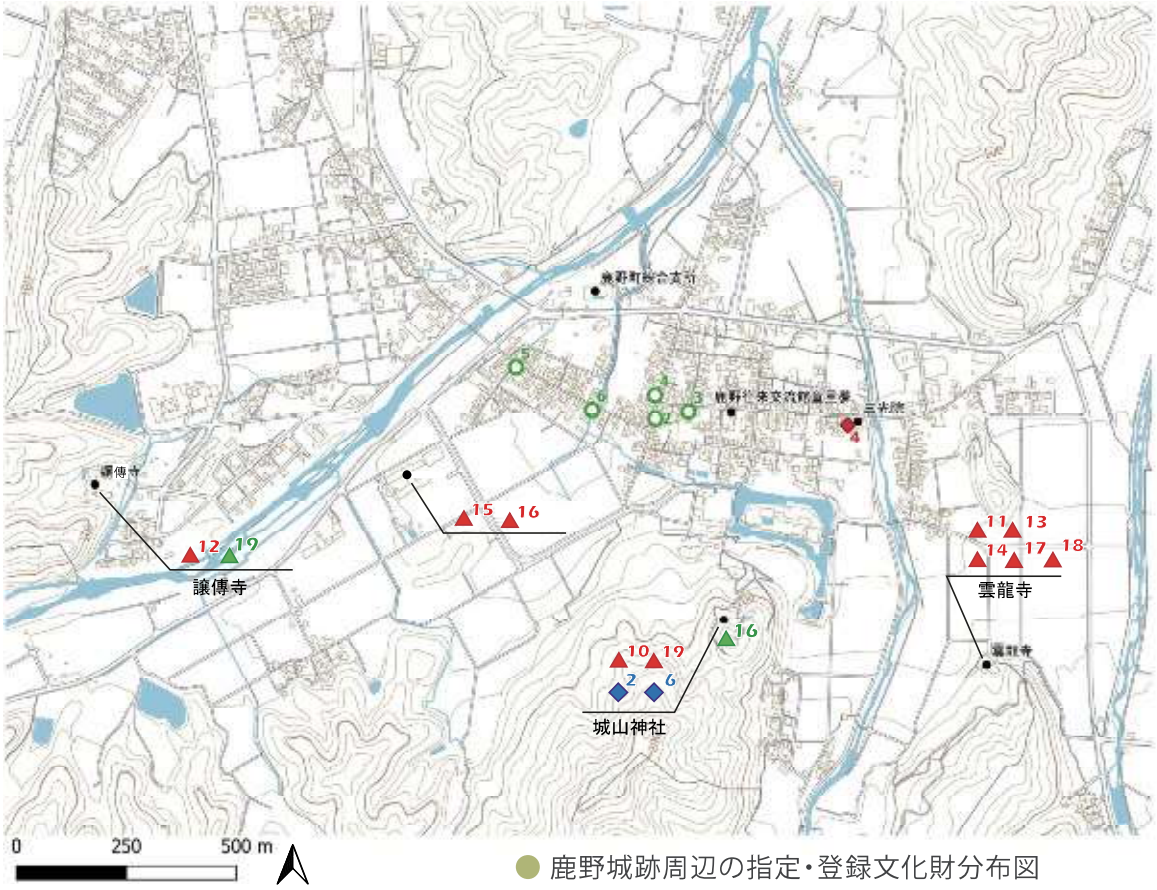


● 鷲峰山麓地域の指定・登録文化財分布図

指定・登録文化財のリストはP165 ～ 167参照。

● 鷲峰山（921m）

● 鉢伏山（514m）



● 鹿野城跡周辺の指定・登録文化財分布図

指定・登録文化財のリストはP165 ～ 167参照。

● 鹿野城跡周辺のまちなみ

【地　勢】

この地域は県東部の西端に位置し、因幡国の気多郡域と重なります。西は東伯郡湯梨浜町、南は東伯郡三朝町と接し、北は日本海に面しています。東は毛無山 (571m) から北に延びる尾根、西は鉢伏山 (514m) から北に延びる尾根、南は高山 (1054m) を含む中国山地の山々に囲まれています。

この地域を流れる川は、西に勝部(かちべ)川水系、東に河内(こうち)川水系があり、豊かな水資源は流域に多くの恵みをもたらし、地域の社会・経済・生活の基盤となっています。南には、鷲峰山 (921m) があり、中国山地から北の長尾鼻まで延びる尾根筋で郡域はおよそ二分されており、西側を山西(やまにし)、東側を山東(さんとう)と呼んでいます。中国山地を水源とする「勝部川」、「浜村川」、「河内川」、「永江川」の４水系はそれぞれ谷底平野を形成し、それぞれの河川から運ばれた土砂によって谷が開ける部分には沖積地が展開しているほか、山西の海岸部には砂が堆積し、「鳴り砂の浜」と呼ばれる海岸砂丘が形成されています。また海に突出した岬のたもとには地形を生かして長和瀬(なごうせ)漁港、夏泊(なつどまり)漁港、酒津(さけのつ)漁港、船磯(ふないそ)漁港が整備されています。

【歴　史】

古代以来、因幡国気多郡は気高(けたか)・鹿野(しかの)・青谷(あおや)地域で構成されており、海岸部は青谷上寺地遺跡に見られるように縄文海退以降に栄えます。特に同遺跡は、内湾となっていた青谷平野に展開し、縄文時代晩期から古墳時代初期にかけて繁栄し、弥生時代後期には「交易拠点としての港湾集落」にまでになりました。この地域は、県内でも古墳の密集度が高い地域となっており、後期の線刻壁画の描かれた阿古山 22 号墳に代表されるように板状安山岩を組み合わせた横穴式石室が丘陵裾部に造られたほか、丘陵上には多くの円墳が造られています。

気高町域の上原遺跡群 (上原(かんばら)・上原西(かんばらにし)・山宮阿弥陀森(やまみやあみだもり)遺跡) では 7 世紀末から 10 世紀頃の大型掘立柱建物跡を含む多くの建物跡や区画溝が検出されました。併せて「郡家一」「中」「長」などと書かれた墨書土器が出土したことから、気多郡衙(けたぐんが)の推定地とされています。このほか同町上光(かみみつ)の戸島(としま)・馬場(ばば)遺跡では倉庫群と考えられる建物跡が確認され、また青谷町の青谷上寺地遺跡・青谷横木遺跡・養郷宮之脇(ようごうみやのわき)遺跡・養郷新林(ようごうしんばやし)遺跡等では、気多郡衙へ向かう古代官道（山陰道）と考えられる道路遺構などが確認されています。

近世初頭には亀井茲矩の統治下、鹿野城下町の整備（鹿野町）や日光池干拓（気高町）等の干拓事業のほか、魚油･胡麻油の製油、蠟燭(ろうそく)の製造などの殖産興業、林業の保護育成、朱印船貿易、夏泊の海女による素潜漁、製紙業（青谷町）が行われ、この地域で今も続く産業の基礎が形成されました。

鹿野町の鹿野城と同城下町は旧態を良く留め、町を望むように造られた明星ヶ鼻の墓所に茲矩は眠っています。また、茲矩に対する愛着が現在も色濃く残り、「城山神社祭礼行事」や「亀井踊」（いずれも県指定民俗文化財）など、茲矩に関連するお祭りが盛んに行われています。

明治以降には各地域で町村合併や編入が行われていき、昭和 30 年 (1955) に誕生した気高町・鹿野町・青谷町は、平成 16 年 (2004) に鳥取市と合併して現在に至ります。

【鷲峰山麓地域年表】

時　代	年　代	できごと
縄文時代	早　期	鹿野町の柄杓目遺跡から、押型文土器が出土。
	晩　期	青谷町の大坪大縄手遺跡から土器・土偶が、青谷横木遺跡から丸木舟が出土。
弥生時代	中　期	気高町の会下・郡家遺跡で、土器のほか正方形プランの竪穴式住居や大型建物跡を検出。
	後　期	青谷上寺地遺跡から「交易拠点としての港湾集落」を示す大量の遺物が検出された。
古墳時代	前　期	前方後方墳の西山１号墳が築かれる。
	後　期	丘陵山麓部に古墳群が形成され、逢坂地域、青谷町日置川流域の早牛、勝部川流域の鳴滝以北に分布が密。阿古山 22 号墳には線刻壁画が残る。
古　代	延長５年 (927)	『延喜式』の神名帳に、利川（はやかわ）神社、幡井（はたい）神社、加知弥（かちみ）神社、板井神社、志加奴（しかぬ）神社が記載される。
中　世	天正３年 (1575)	尼子晴久因幡に侵攻、鹿野城攻略。
	天正９年 (1581)	鳥取城落城後、秀吉は亀井茲矩に気多郡１万３千余石を与え、鹿野城に配した。
	天正 16 年 (1588)	亀井茲矩、日光池の干拓に着手。
近　世	慶長５年 (1600)	関ヶ原の戦いに亀井茲矩は東軍に参加し、翌年２万５千石を加増される。
	慶長７年 (1602)	亀井茲矩、大井手用水の工事に着手。
	元和３年 (1617)	亀井氏石見国（現島根県津和野町）に移封され、以後、幕末まで鳥取藩領となる。
	文久元年 (1861)	下坂本村の富山甚平が同村から一千間の水路を開削、砂流し法で砂丘を崩し新田を開発。
近　代	明治 29 年 (1896)	気多郡（15 ヶ村）と高草郡が合併して気高郡が成立したが、昭和 28 年 (1953) までに旧高草郡域が鳥取市に編入され、気高郡は旧気多郡（気高・鹿野・青谷３町）となった。
	明治 32 年 (1899)	鹿野村が町制施行。
	大正３年 (1914)	青谷村が町制施行。
	昭和 18 年 (1943)	鳥取大地震発生。鹿野町末用に横ずれ断層が残る。
現　代	昭和 28 年 (1953)	青谷町と日置谷村・中郷村・勝部村が合併し、青谷町誕生
	昭和 30 年 (1955)	宝木村・酒津村・瑞穂村・逢坂村・浜村町が合併し、気高町誕生。鹿野町・勝谷村・小鷲河村が合併し、鹿野町誕生。青谷町に日置村が編入。
	平成５年 (1993)	「鳥取市あおや郷土館」オープン。
	平成 13 年 (2001)	「青谷上寺地遺跡展示館」オープン。
	平成 16 年 (2004)	気高町・鹿野町・青谷町が鳥取市と合併し、気高郡が消滅する。
	令和元年 (2019)	日本遺産「北前船寄港地」に青谷地区が追加指定。
		麒麟のまち圏（鳥取市を含む１市６町）によるストーリーが、日本遺産に認定。

【鷲峰山麓地域の指定文化財と登録文化財】

※令和３年３月 31 日時点で、地域内にある指定・登録文化財を掲載。

		No.	指定種別	名　称	所　在　地	資料編掲載頁
もの	★	1	重要文化財	青谷上寺地遺跡出土品	青谷町青谷	P3
	◆	1	保護文化財	木造薬師如来坐像	気高町常松　薬師堂	P17
		2	保護文化財	木造十一面観音立像（木喰仏）	気高町飯里　延命庵	P17
		3	保護文化財	絹本著色江戸風景図（額装）	気高町上光	P15
		4	保護文化財	木造薬師如来立像	鹿野町鹿野　三光院	P17
		5	保護文化財	竹虎図屏風	気高町上光	P16
		6	保護文化財	切支丹灯篭	気高町酒津　東昌寺	P19
	▲	1	保護文化財	勝見薬師堂本尊薬師如来像及び仏龕	気高町勝見	P33
		2	保護文化財	十一面観世音菩薩立像	気高町宿	P33
		3	保護文化財	殿聖観世音菩薩坐像	気高町殿	P34
		4	保護文化財	宝木観音堂子安観音像	気高町宝木	P34
		5	保護文化財	本尊普賢菩薩像	気高町重高	P34
		6	保護文化財	石造観音菩薩像	気高町重高	P38
		7	保護文化財	伝亀井茲矩筆跡	鹿野町寺内	P36
		8	保護文化財	伝松平石見守輝澄筆跡	鹿野町寺内	P36
		9	保護文化財	池田光仲寄進状	鹿野町寺内	P35
		10	保護文化財	城山神社彫刻	鹿野町鹿野	P33
		11	保護文化財	因幡民談（写本）	鹿野町鹿野　雲龍寺	P36
		12	保護文化財	雲板	鹿野町今市　譲傳寺	P35
		13	保護文化財	鹿野筆縋	鹿野町鹿野　雲龍寺	P36
		14	保護文化財	愛宕起記	鹿野町鹿野　雲龍寺	P35
		15	保護文化財	井江耕宗・名和長年公絵	鹿野町鹿野	P32
		16	保護文化財	井江耕宗・菅原道真公絵	鹿野町鹿野	P32
		17	保護文化財	池田光仲寺領寄進状	鹿野町鹿野　雲龍寺	P35
		18	保護文化財	本長寺跡屋敷拝領状	鹿野町鹿野　雲龍寺	P36
		19	保護文化財	鹿野祭屋台	鹿野町鹿野	P35
		20	保護文化財	銅鏡	青谷町青谷　あおや郷土館	P39
		21	保護文化財	嘉慶の碑	青谷町青谷	P37
		22	保護文化財	甘藷代官彰徳碑	青谷町青谷	P37
		23	保護文化財	興宗寺の万霊塔	青谷町青谷	P37
		24	保護文化財	礒江文書	青谷町青谷　あおや郷土館	P35
		25	保護文化財	妙見山万福寺文書	青谷町青谷　あおや郷土館	P36
		26	保護文化財	小畑の五輪塔	青谷町小畑	P37
		27	保護文化財	八葉寺大門の六地蔵	青谷町八葉寺	P38
		28	保護文化財	利川神社末社の彫刻	青谷町早牛	P34
		29	保護文化財	幡井神社本殿の彫刻	青谷町絹見	P34
		30	保護文化財	引地一石五輪塔	青谷町絹見	P38
凡　例		★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定				

		No.	指定種別	名　称	所　在　地	資料編掲載頁
場	★	1	史跡	青谷上寺地遺跡	青谷町青谷・吉川	P7
		2	史跡	津和野藩主亀井家墓所附亀井茲矩墓	気高町山宮	P6
	◆	1	史跡	阿古山 22 号墳	青谷町青谷	P27
		2	天然記念物	鹿野地震断層の痕跡	鹿野町末用	P30
		3	天然記念物	相屋神社社叢	青谷町青谷	P28
	▲	1	史跡	沢見塚古墳	気高町奥沢見	P43
		2	史跡	西山 1 号墳	気高町下坂本	P44
		3	史跡	宝木 1 号墳	気高町宝木	P44
		4	史跡	宝木 16 号墳	気高町宝木	P44
		5	史跡	上光 10 号墳	気高町上光	P43
		6	史跡	矢口 1 号墳	気高町下坂本	P45
		7	史跡	重高 4 号墳	気高町重高	P43
		8	史跡	重高 5 号墳	気高町重高	P43
		9	史跡	漆谷横穴	気高町重高	P43
		10	史跡	殿 15 号墳	気高町殿	P44
		11	史跡	殿 25 号墳	気高町殿	P44
		12	史跡	睦逢 11 号墳	気高町睦逢	P44
		13	史跡	八束水 7 号墳	気高町八束水	P45
		14	史跡	両国梶之助の墓地	気高町宝木	P45
		15	史跡	稲富家墓地	気高町宿	P45
		16	史跡	鹿野城跡	鹿野町鹿野	P42
		17	史跡	奥崎古墳群	青谷町奥崎	P43
		18	史跡	養郷 10 号墳	青谷町養郷	P45
		19	名勝	譲傳寺庭園	鹿野町今市	P47
		20	天然記念物	霧島つつじ	気高町下光元	P47
		21	天然記念物	布勢平神社社叢林	気高町殿	P48
		22	天然記念物	阿弥陀森の大タブノキ	気高町山宮	P47
		23	天然記念物	清宗院の大シイ	青谷町小畑	P48
		24	天然記念物	子守神社の大イチョウ	青谷町八葉寺	P48
		25	天然記念物	子守神社の岩窟	青谷町八葉寺	P49
	○	1	登録有形文化財	大井家住宅主屋	気高町上光	P11
		2	登録有形文化財	熊谷家住宅主屋	鹿野町鹿野	P11
		3	登録有形文化財	原田家住宅主屋	鹿野町鹿野	P12
		4	登録有形文化財	田中家住宅主屋	鹿野町鹿野	P11
		5	登録有形文化財	高田家住宅主屋	鹿野町鹿野	P11
		6	登録有形文化財	石尾家住宅主屋、土蔵、門及び塀	鹿野町鹿野	P10
凡　例		★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定、○…国登録				

		No.	指定種別	名　称	所　在　地	資料編掲載頁
こと	★	1	重要無形民俗文化財	因幡の菖蒲綱引き	気高町水尻	P5
		2	重要無形民俗文化財	因幡の菖蒲綱引き	気高町宝木	P5
		3	重要無形民俗文化財	因幡の菖蒲綱引き	青谷町青谷	P5
		4	重要無形民俗文化財	酒津のトンドウ	気高町酒津	P5
	◆	1	無形民俗文化財	ため池における魚伏籠（ウグイ）漁	気高町睦逢	P24
		2	無形民俗文化財	志加奴・城山神社獅子舞	鹿野町鹿野	P23
		3	無形民俗文化財	亀井踊	鹿野町鹿野	P22
		4	無形民俗文化財	日置のはねそ踊	青谷町河原	P23
		5	無形民俗文化財	百手の神事	気高町八束水　姫路神社	P25
		6	無形民俗文化財	城山神社祭礼行事	鹿野町鹿野　城山神社	P24
		7	無形文化財	因州青谷 こうぞ紙	青谷町山根、河原	P26
		8	無形文化財	染織（保持者・山下健）	青谷町河原	P26
		9	無形文化財	紙布（保持者・山下健）	青谷町河原	P26
	▲	1	無形民俗文化財	亥の子行事	気高町姫路	P40
		2	無形民俗文化財	河内はねそ踊り	鹿野町河内	P40
		3	無形民俗文化財	勝部岩力踊り	青谷町旧勝部校区一円	P40
		4	無形民俗文化財	青谷駅前傘踊り	青谷町青谷地区	P40
凡　例		★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定				

● あおや和紙工房

● あおや郷土館

● 鹿野往来交流館 童里夢

● ライトアップされた鹿野城跡公園

第3章

28. 縄文からの交易地と中世の動乱

今から約 160 万年前に起きた鉢伏山付近の火山活動によって流れ出した溶岩は、南北に連なる台地を形成し、一部は日本海に半島状に突き出て長尾鼻となりました。長尾鼻の東側にある魚見台からは、浜村海岸から鳥取砂丘（浜坂砂丘）に続く海岸線が一望できます。

約 6,000 年前の海岸線は、縄文海進による海面上昇によって現在の形状とは大きく異なっており、往時の海岸線は現在の平野部に入り込んで内海を形成していました。弥生時代には海岸線が退き、砂州が発達したことによって水尻池や日光池等の潟湖が形成されました。長尾鼻の西側、勝部川と日置川の合流地点の潟湖のほとりに立地した青谷上寺地遺跡の出土品からは、農耕や漁撈等に加え大陸・半島を含む各地との交流を示す遺物が確認されています。このことから、当遺跡は日本海交易の拠点として栄えた港湾集落であったことがうかがえます。

また、長尾鼻から続く台地の西側に位置する阿古山（あこやま）22 号墳の石室に描かれた船の線刻壁画や青谷上寺地遺跡から出土した線刻画から、この地域に住んでいた人たちは、潟湖から船で日本海に漕ぎ出し、朝鮮半島や日本各地との交流や環日本海交易を行っていたと考えられます。その後、この地域は亀井茲矩の朱印船貿易や江戸時代の北前船による交易で栄えることになります。

平野部にある青谷横木遺跡で確認された古代山陰道は、幅員６～７ｍで柳の街路樹が植えられ、斜面地から丘陵上に続く養郷宮之脇遺跡ではつづら折りの古代山陰道が見つかっています。この道跡は因幡国と畿内の都とをつなぐ、重要な交通路であったことがうかがえます。

古代以降は、鳥取城から鹿野城を経由して伯耆国に至る鹿野往来や、沿岸部を通る伯耆往来などの街道が通っていたこの地域には、街道を押えるように山々に山城が築かれ、戦国時代の動乱に巻き込まれていきます。

因幡山名氏と但馬山名氏の対立によって、出雲国守護の尼子晴久が天文 13 年 (1544) 因幡国に侵攻し、志加奴（しかぬ）城（鹿野城）や勝山城、大崎城等を攻め落とします。

永禄６年 (1563)、因幡山名氏は安芸毛利氏と手を結んだ武田高信との戦いに敗れ、布施天神山城から鹿野城に退きますが、安芸毛利氏が因幡に進出し、因幡国の実質的支配は毛利・武田氏に移りました。

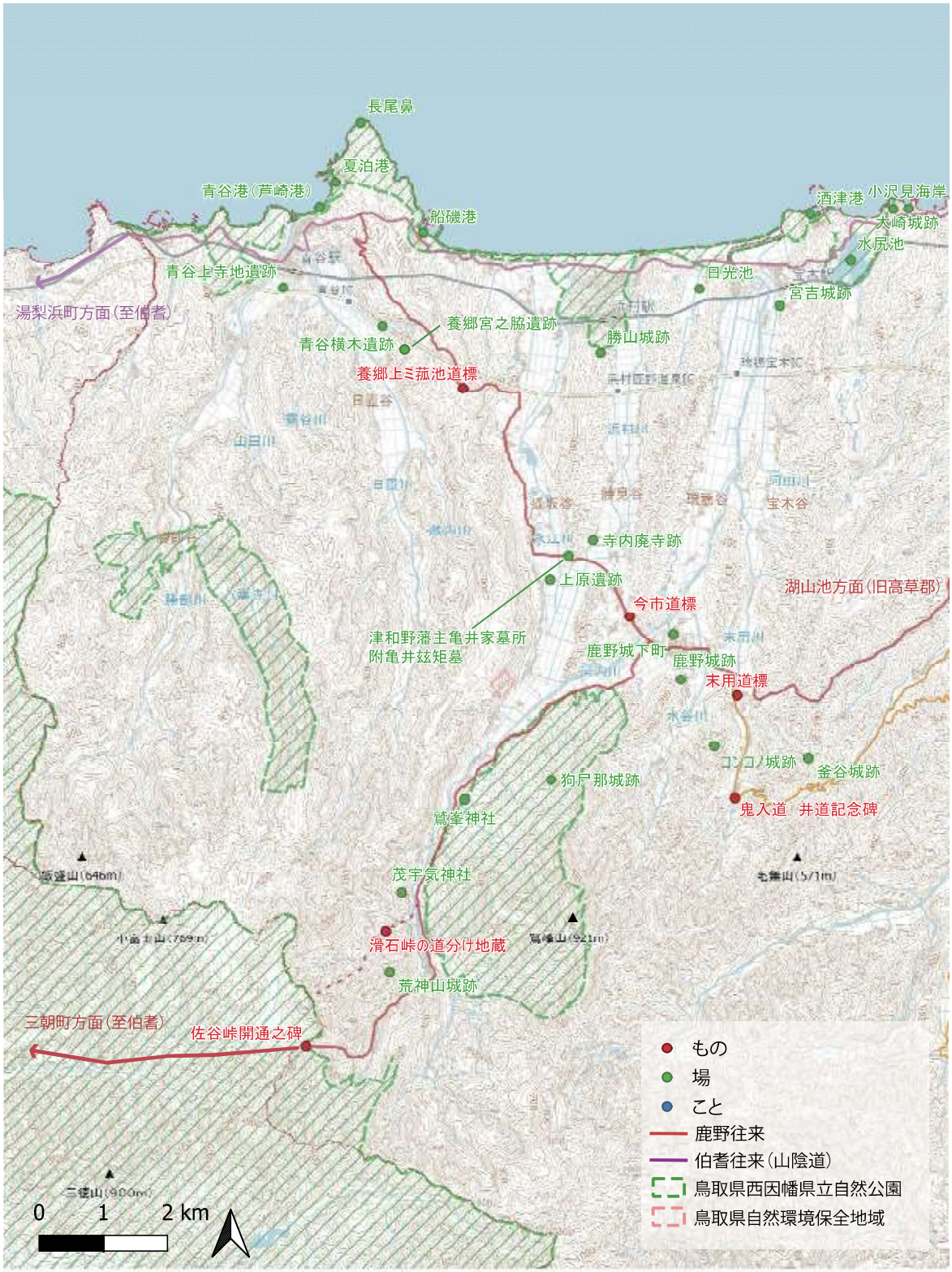
その後、尼子勝久・山中幸盛が武田氏を破るなどして因幡国を支配下に置きますが、天正３年 (1575)、毛利方の吉川元春が因幡国に侵攻し、荒神山（こうじんやま）城、宮吉（みやよし）城等を攻め落とし、尼子氏を退けます。

しかし、天正４年 (1576) 織田信長に追われた将軍足利義昭（あしかがよしあき）が、毛利氏を頼って鞆（とも）の浦（うら）に逃れると、織田と毛利の対立は決定的となり、織田信長の中国征伐が行われました。

天正８年 (1580)、織田方の羽柴秀吉の鳥取城攻めが起こり、毛利方が立て籠もる鹿野城や宮吉城、狗尸那（くしな）城を亀井茲矩が攻略し鹿野城主となります。

天正９年 (1581)、羽柴秀吉による再度の鳥取城攻めでは、着陣した秀吉軍は鳥取城等を完全に取り囲み兵糧の補給路を遮断します。海上からの補給にも目を配った秀吉は、毛利方の大崎城も攻め落とし、海上交通の要所を押えました。

このように、この鷲峰山麓地域には中世から近世にかけての動乱を物語る山城が今も残っています。



● 28.縄文からの交易地と中世の動乱　ストーリーマップ

29. 古代山陰道と青谷上寺地遺跡

海退によって形成された潟湖のほとりに栄えた青谷上寺地遺跡は、別名「地下の弥生博物館」とも呼ばれ、弥生時代の生活や交流の実態を示す多種多様な出土遺物が良好な保存状態で遺されています。水田跡やこの地方で産出されないヒスイやサヌカイト・碧玉などの石材を使った管玉（くだたま）、勾玉（まがたま）、中国・朝鮮半島・北部九州の特徴を持った鉄製品や貨泉（かせん）（中国・新の王莽（おうもう）が天鳳元年 (西暦 14) から鋳造した貨幣)、花弁高杯（かべんたかつき）に見られる精巧な木製品などが確認されています。これらの出土遺物は日本海を往来し、中国・朝鮮半島を含む各地域と交流・交易を行っていたことを物語っています。

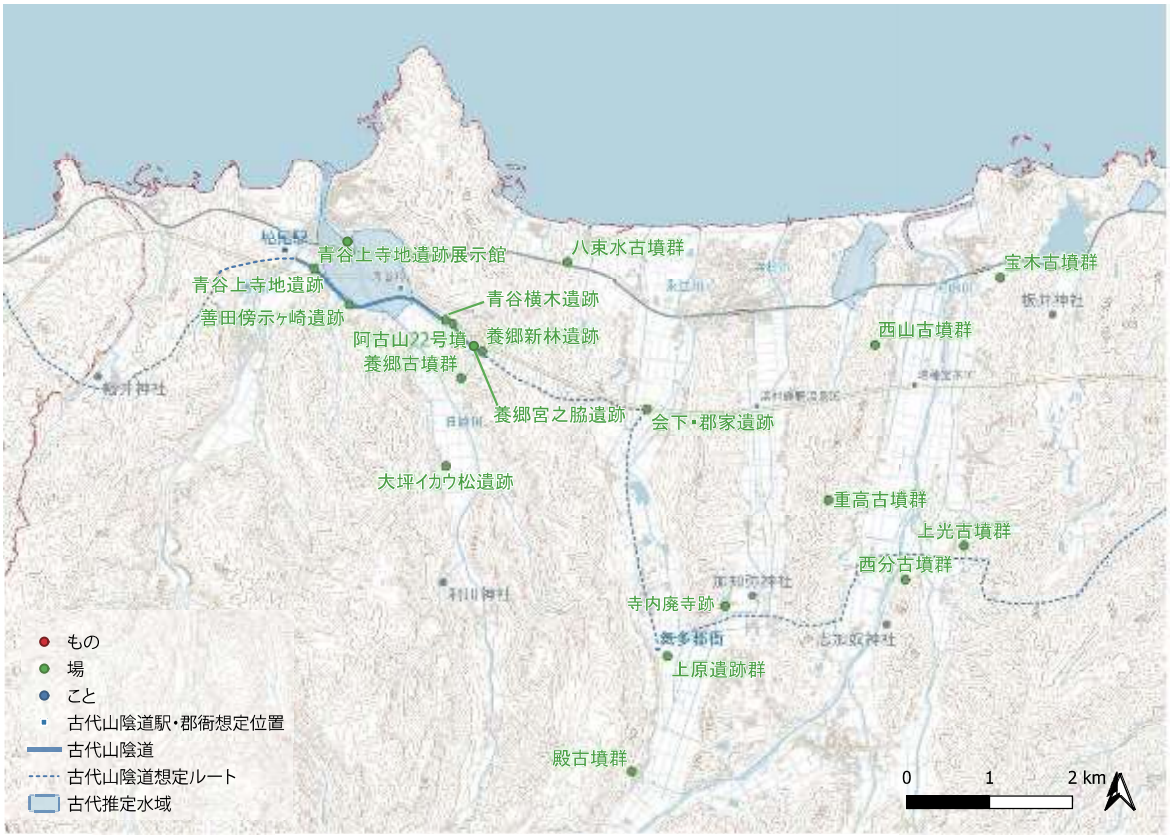
このほか木の枝や葉を敷き詰めて補強し、盛土を行う敷葉（しきば）・敷粗朶（しきそだ）工法で整備された古代山陰道も確認しています。古代山陰道は律令国家のもと整備された都と地方を結ぶ道路の１つであり、古代山陰道が通る青谷上寺地遺跡は弥生時代だけでなく、それ以降の時代でも交易・交流の拠点であったと考えられます。現在古代山陰道は青谷上寺地遺跡のほか東側丘陵裾部の青谷横木遺跡、丘陵上の養郷新林遺跡、養郷宮之脇遺跡で確認されており、青谷横木遺跡では幅６～７mで柳の街路樹が確認され、養郷新林遺跡では低地部から丘陵上に向かう急峻な地形にあわせて、つづら折りの道が造られていたことが確認されています。これらの道は都と地方を結ぶ古代のハイウェイとしての役割を担っていました。

この地域には、青谷上寺地遺跡以外にも弥生時代の大型の建物跡等が確認された会下・郡家遺跡や、この地域で最大の前方後方墳である西山１号墳、銅鋺（どうわん）が出土した谷奥１号墳、船の線刻画が描かれた横穴式石室を持つ阿古山 22 号墳などが丘陵の山裾や尾根上に築造されています。また古代の気多郡の郡衙跡と考えられる上原遺跡群や古代寺院の跡である寺内廃寺跡などが確認されており、これらの遺跡を結ぶ線上に古代山陰道が通っていたことも考えられます。また古代山陰道によって人や物とともに伝わった技術・信仰等は、この地域の人々の営みに大きな影響を与えたと考えられます。

● 青谷上寺地遺跡出土品（国重要文化財）
写真提供：鳥取県とっとり弥生の王国推進課

● 弥生時代の終わり頃の景観（復元CG）
提供：鳥取県とっとり弥生の王国推進課

● 現在の青谷町付近
写真提供：鳥取県とっとり弥生の王国推進課



29. 古代山陰道と青谷上寺地遺跡　ストーリーマップ

青谷上寺地遺跡（国史跡）

青谷横木遺跡
写真提供：鳥取県埋蔵文化財センター

青谷上寺地遺跡展示館

30. 溶岩台地がもたらした豊かな水源

今から約 160 万年前に起きた火山活動によって鉢伏山 (514 m) 付近から流れ出た安山岩質の溶岩は、なだらかな台地状の地形を形成しました。この台地を、勝部川や日置川とその支流が長い時間をかけて谷壁を削り、岩窟や多くの滝が生まれました。これら自然がつくり出した景観はいつしか信仰の対象となり、巨大な岩窟には子守神社が鎮座し、山陰地方の霊場御滝山の不動滝・湯原滝・妙円滝は、人々の祈りの場となっています。

鳴滝や八葉寺（はっしょうじ）の採石場跡に見られる安山岩の大露頭（だいろとう）は、この地域の採石事業の歴史を物語り、江戸時代に鳥取城の修復・拡張工事の為の石材の採石と木材の伐採の際の労働歌がもとになった「勝部岩力踊（かちべがんりきおど）り」が、今も地域に伝わっています。

この一帯は、溶岩台地を削った勝部川と日置川が平野部に流れ込み、湖沼のない平野部に豊かな水をもたらしています。また、「布勢の清水」などに見られる美しい湧水は、この地域の人々の生活を支え、豊富な水を必要とする（手漉（てすき））和紙の生産を可能にしました。

江戸時代の初めにこの地域に伝えられたとされる美濃紙の技法は、亀井茲矩の殖産政策によって発展し、明治 40 年 (1907) には、湧き水を利用した水車や水力発電による電力を使って工業化され、大正 7 年 (1918) ごろに気高水力発電会社ができたことで、さらに発展しました。また伝統的な手漉きによる和紙生産も続けられ、現在「因州青谷こうぞ紙」は、鳥取を代表する伝統工芸品となっています。この地域を拠点に活動する「染織」の鳥取県無形文化財保持者山下健氏は、青谷の和紙を使った糸で織り上げた「紙布」の作品を世に送り出し、因州和紙の可能性を広げています。

＜コラム＞　気多七仏薬師

諸国に仏教を説いて回ったと言われる奈良時代の僧行基（ぎょうき）が、因幡国気多郡にしばらく留まり、この地方でハネリと呼ばれるタブノキの大木から 7 体の薬師如来像を彫り、郡内各所に寺院を営まれ、祀ったといわれています。その 7 ヶ寺は、気高町日光の東行寺、会下の禅入寺、常松の薬師堂、青谷町絹見の千龍寺、養郷の西生寺、鹿野町末用の法楽寺といわれ、残る一つが鹿野町寺内にあったと伝わりますが、寺名は判っていません。

このうち気高町常松の薬師堂に安置してある木造薬師如来坐像（県：保護文化財）は、現在まで伝わっている気多七仏薬師の一つといわれています。

この行基は、天平 15 年 (743) の奈良東大寺大仏殿造営の勧進役（かんじんやく）（資金集め役）に起用され、その責務を果たし、天平 17 年 (745) に大僧正（だいそうじょう）に任命されています。

● 30. 溶岩台地がもたらした豊かな水源　ストーリーマップ

● 安山岩の大露頭

● 子守神社

● 布勢の清水

31. 亀井茲矩と鹿野城

亀井茲矩は、弘治３年 (1557)、現在の島根県松江市玉湯町に、尼子氏家臣で湯永綱の子として産まれました。父が尼子氏再興を願う山中幸盛らと共に戦う中で戦死したため、家臣らに養育され、元亀３年 (1572) 出雲を出て因幡国気多郡の井村覚兵衛のもとに身を寄せました。そして天正元年 (1573) 因幡に来た山中幸盛と再会し、翌年幸盛の養女をめとり、亀井姓を名乗ります。

天正８年 (1580)、羽柴秀吉による鳥取城攻めに参戦し、秀吉の命により先陣を切って鹿野城を攻略し、その功績により翌天正９年 (1581)、秀吉から気多郡１万 3,800 石の領地を賜った茲矩は、領地内の新田開発に乗り出し、天正 16 年 (1588) 当時潟湖であった日光池の水を海に流すことによって、約 12 町歩 (約 12ha) と言われる新田を作りました。このほか日置谷・勝見などでも干拓事業を行っています。

茲矩は、その後も秀吉に付き従って朝鮮出兵に参加しましたが、慶長５年 (1600)、関ヶ原の合戦では、因伯地方で唯一東軍に属したことで高草郡を賜り、千代川の左岸域の３万 8,000 石の領主となりました。慶長６年 (1601) から約７年の歳月をかけて開削した大井手用水は、千代川下流の河原村に取水堰を設け、延長約５里 (約 22 ｋｍ)、約 1,300 町歩 (約 1,290ha) の水田を開きました。現在も残る大井手用水は、平成 17 年度に全国の自然環境に恵まれた農業用水として「疎水百選」(全国水土里ネット) に選ばれています。

茲矩の目は海外にも向けられ、九州以外の大名では唯一、朱印船貿易を行っています。慶長 12 年 (1607) から朱印状の発給を三度受け、東南アジア諸国との交易を行いました。交易で入手した品のうち、布製品や、象牙・サイの角などが現在も残っています。亀井家の菩提寺となった譲傳寺には、「孔雀文刺繡織物」(伝亀井茲矩将来品) が伝わりました。（現在鳥取県立博物館寄託）また、亀井茲矩が家臣の塩氏へ宛てた書状である「塩文書」には造船に関する指示や朱印状下付の見込みなどが記されており、亀井茲矩が行った朱印船貿易をうかがい知ることができます。また朱印船貿易で輸入した生姜は、現在「日光生姜」として地域の特産品となっています。

茲矩は、産業の振興にも力を入れ、殖産に必要な樹木を指定し「村々切らざる木」として保護し、その中の一つである楮を原料とする「因州青谷こうぞ紙」は、後に鳥取藩の貴重な収入源となり、その製紙業は、今も受け継がれています。また朝鮮出兵の際に、船頭を務めた筑前の漁師に、夏泊の地に居宅を建て与えました。その妻が、素潜りの技を伝えたことが夏泊の海女漁のはじまりとされています。

● 亀井茲矩像
太皷谷稲成神社所蔵
（島根県津和野町）

● 大井手用水
(河原町付近)

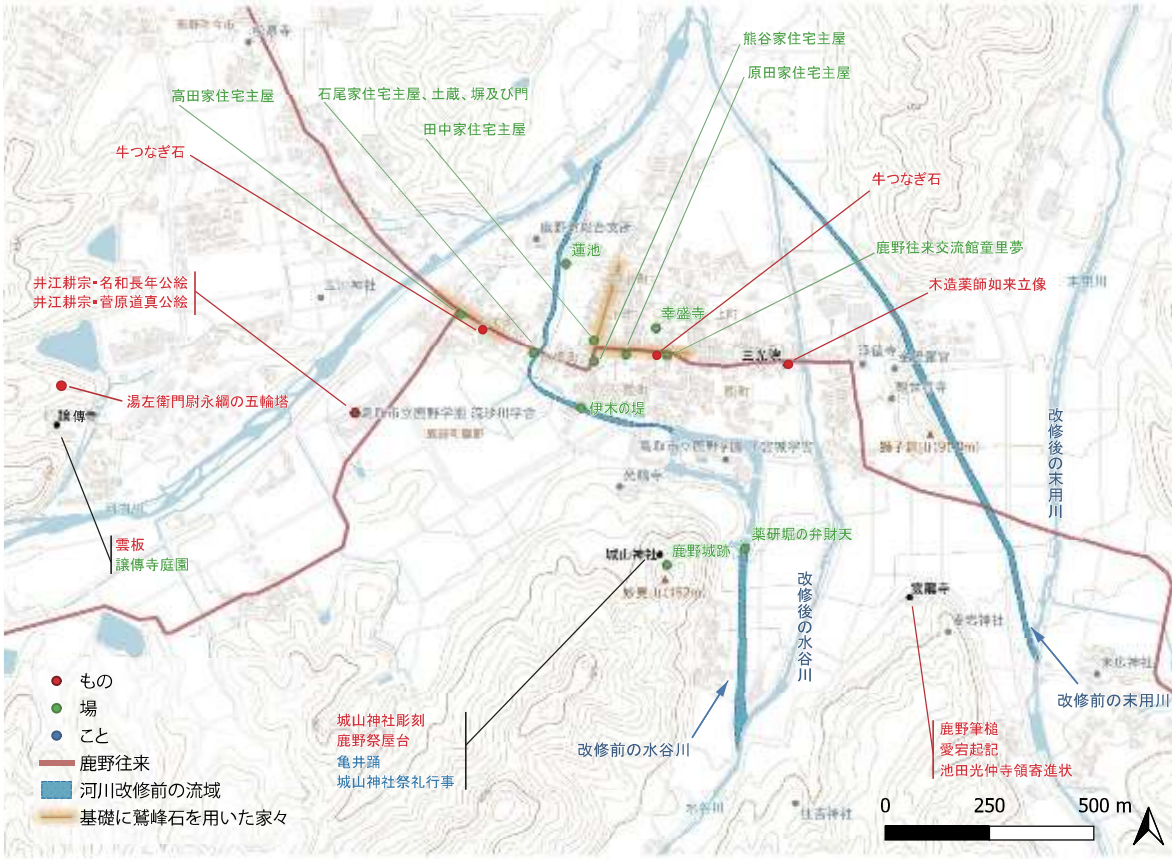
● 31. 亀井茲矩と鹿野城　ストーリーマップ①:広域図

一方鹿野城が築かれた妙見山の麓の台地に城下町を整備するために、水谷川と末用川の付け替え行いながら、鹿野城の内堀や城下町内の水路に水を引き込むなどの治水事業を行い、現在の鹿野城下町の基礎を築きました。

このように領地の発展のため尽力した茲矩は、領民から慕われながら、慶長 17 年 (1612) 鹿野城内で没しました。息子の政矩は、徳川二代将軍秀忠から領地を安堵され、城の拡張や城下町の整備に着手しますが、元和 3 年 (1617) に石見国の津和野に移封(いほう)され、高草郡・気多郡は池田光政領となり、光仲を経て幕末まで鳥取藩領となりました。

茲矩によって台地の上に作られた鹿野城下町は地震にも強く、昭和 18 年 (1943) に発生した鳥取大地震でも大きな被害を受けることなく、江戸末期から明治頃の伝統的な街並みが今も残されています。また義理の父にあたる山中幸盛の菩提を弔う幸盛寺(こうせいじ)や茲矩が禅の修行を行ったとされる亀井家の菩提寺の譲傳寺などの寺院を建立しました。また三光院の本尊となっている木造薬師如来立像は、夜毎光が立ち上がる場所を茲矩の命により探ったところ発見されたとされる仏像です。さらに鹿野城攻防に由来するといわれる「亀井踊り」、茲矩が鹿野城主であった頃の城の守り神とした城山神社の「鹿野祭り」が現在まで伝わっています。

茲矩は、鹿野の町が見渡せる武蔵山の明星ヶ鼻と呼ばれる丘陵上に葬られ今も鹿野の町を見守り続けています。



● 31. 亀井茲矩と鹿野城　ストーリーマップ②：鹿野城跡周辺

● 春の鹿野城跡公園

● 津和野藩主亀井家墓所附亀井茲矩墓
（国史跡）

● 鹿野のまちなみ

● 牛つなぎ石（白枠内）
年貢米の運搬や商取引のために引いてきた牛をつないでおくために使われたものです。

32. 海岸線に見る江戸時代からの歴史

弥生時代の交易拠点と考えられる青谷上寺地遺跡にも見られる海上交通は、青谷・夏泊・船磯・酒津の港を繋ぎ、小型舟による沿岸部を航路とした海運が行われていたと考えられます。

また勝部川河口の芦崎（あしざき）の港町は、亀井茲矩による朱印船貿易や、日本海廻船の寄港地として発展しました。

八軒屋（はちけんや）と呼ばれる商人たちがいた港町には、今も当時の町割りや津出し路地と呼ばれる物資を運んだ通路が残り、河口付近に鎮座する湊神社には、商人たちの屋号が記された灯籠や狛犬、舟形の神輿が残っています。

一方、海岸線に広がる砂丘地は、長く耕作不適の地として放置されていましたが、享保 3 年 (1718) 鳥取藩士和田得中（わだとくちゅう）が、姉泊（あねどまり）一帯の新田開発を願い出て、自力で干拓事業を行いました。当時、一面の砂丘地であった姉泊一帯を、得中、その子兵助（へいすけ）、孫の忠太夫（ちゅうだゆう）、曾孫の又市（またいち）の四代に渡り新田を開発しました。その開発された新田に新村を立てることが認められ、文化 14 年 (1817) に「和田村」となった場所には、現在でも「下原新田」、「姉泊新田」という地名が残っています。

下坂本村の富山甚平（とやまじんべい）も、文久元年 (1861) に藩の許可を得て、独力で砂丘地の開墾を行い、甚平が明治 23 年 (1890) に亡くなった後も、この事業は三代に渡って引き継がれ、約 18 町歩 (約 18ha) の田畑を完成させました。

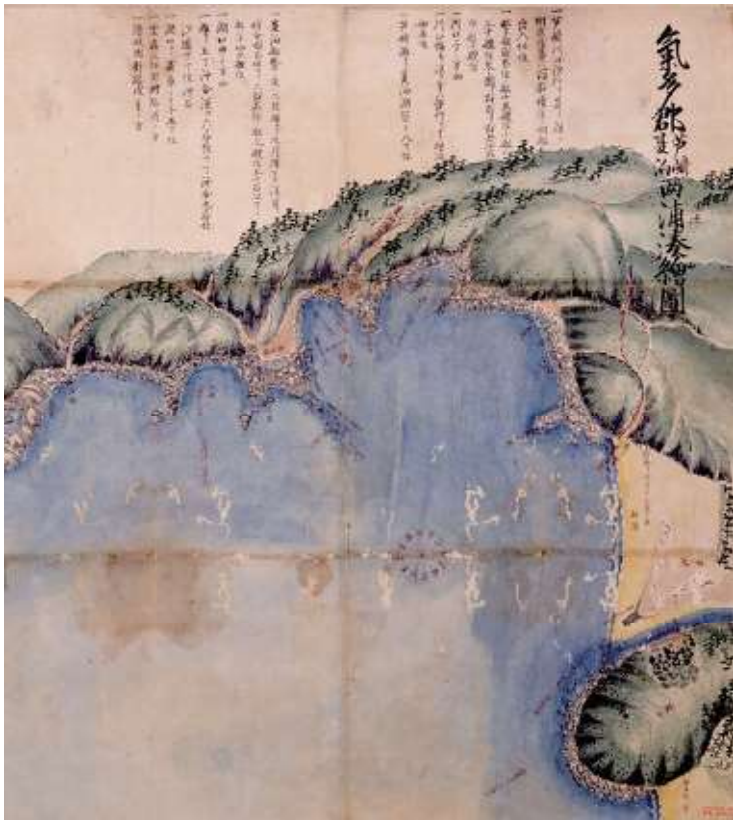
また、明治に入ってからも砂丘地の開発は続けられ、浜村砂丘の開発は、明治 16 年 (1883) から高田亀三郎、大正 3 年 (1914) に田中房治郎（ふさじろう）、大正 7 年 (1918) に木下六蔵ら三人が、飛砂防止のための砂防垣や防砂林を設けるなどして、約 44 町歩 (約 44ha) の砂丘地を畑地に変え、この地域の発展に大きく貢献しました。

このように、厳しい自然環境の中で暮らしてきたこの地域の人々が、五穀豊穣（ごこくほうじょう）や厄災除去を祈って行ってきた伝統行事には、青谷・宝木（ほうぎ）・水尻（みずしり）に残る因幡の菖蒲綱引き、港町酒津（さけのつ）で行われる酒津のトンドウ、姫路神社の百手（ももて）の神事（しんじ）があり現在も伝わっています。

● 夏泊海岸と長尾鼻

● 酒津のトンドウ
（国重要無形民俗文化財）

● 32. 海岸線に見る江戸時代からの歴史　ストーリーマップ



● 気多郡芦崎夏泊両浦湊絵図（けたぐんあしざきなつどまりりょううらみなとえず）　鳥取県立博物館所蔵

北前船で繁栄した芦崎（現・鳥取市青谷町）を描いた江戸時代の絵図です。

● 夏泊の海女

● 菖蒲綱引き
（国重要無形民俗文化財）

33. 鷺の湯伝説と貝がら節

現在のJR山陰本線浜村駅南東側には、室町後期頃大きな湿地帯が広がっていたと考えられます。そこから一羽の傷ついた鷺(さぎ)が傷を癒(いや)して飛び立っていったのを見た武将が温泉を発見したという謂(いわ)れのある「鷺の湯伝説」が残っています。

鷺の傷を癒した湯には、鹿野城主となった亀井茲矩も幼い姫を連れて入湯し、その際深い湯壺に手頃な石を沈め、姫が立てるようにしたところ、茲矩が「これが姫が石じゃ」と言ったことから、村人が「姫石温泉」と呼ぶようになったと伝わっています。

その後、この周辺から湧き出す湯は勝見温泉として知られるようになり、江戸時代には鳥取藩主とその一族や湯治(とうじ)客も訪れ、因幡の名湯となりました。

勝見温泉の守護神として祀られた薬師如来像は、鳥取藩主の信仰が厚く、湯治のたびに参拝し、今でも地元の人々に親しみを込めて「お薬師さん」と呼ばれています。

明治16年(1883)浜村から鳥取までの道路建設によって、新道沿いのJR浜村駅の近くで偶然発見された浜村温泉は、アクセスの良さから人気が出ました。昭和8年(1933)には、浜村温泉のPRのため、地元の民謡である「貝殻節」をもとにした「貝がら節」をレコード化したところ、当時の新民謡ブームに乗って、浜村温泉の名前を全国に広めることとなりました。最盛期には10軒以上の温泉旅館が軒を連ねて賑わっていました。

温泉町の北側小高い丘陵地に「浜村砂丘公園」、通称ヤサホーパークがあります。この「ヤサホー」は、今でも地域で親しまれている貝殻節の掛け声にちなんでいます。一帯は山陰海岸ジオパークにも登録されている浜村砂丘と呼ばれる砂丘地で、砂が堆積してできた小高い丘から日本海や鷲峰山を望むことができ、芝生が拡がる広大な敷地内にはユニークなモアイ像が目印となっている足湯や、温泉自販機などもあります。

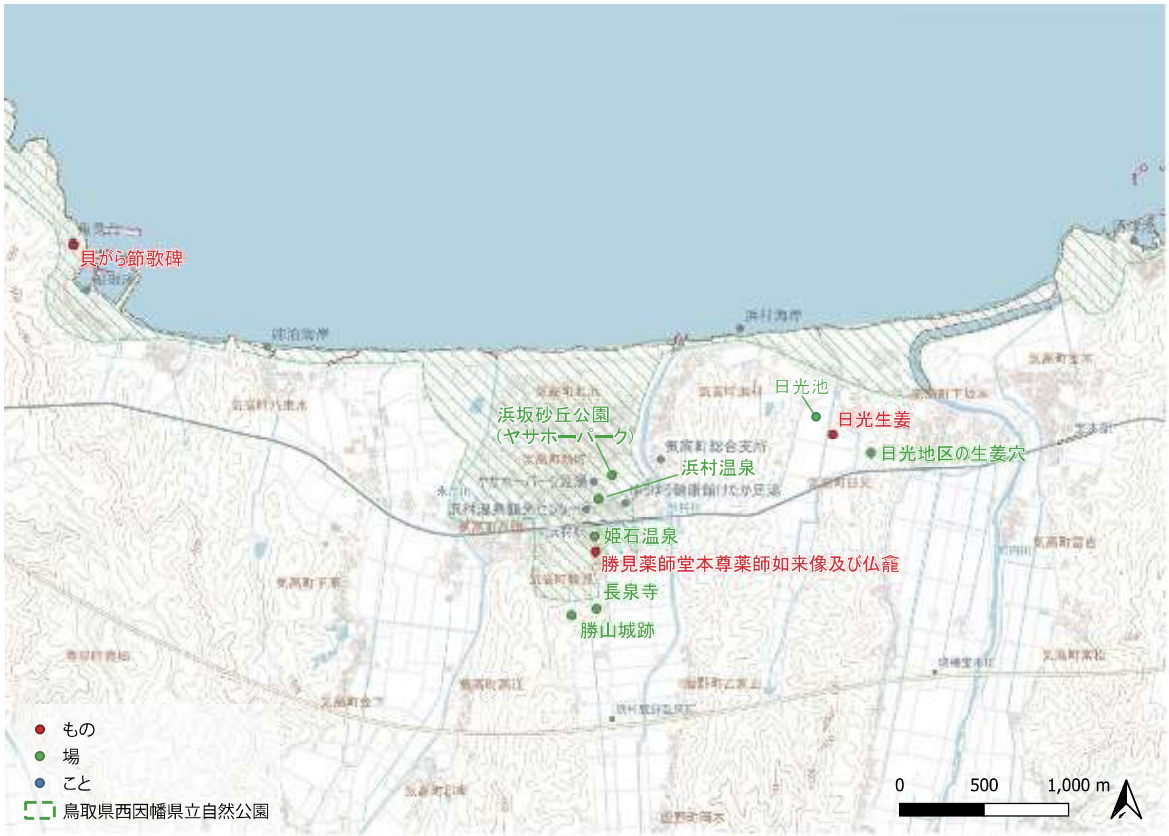
鷺の湯伝説から始まった五百年の歴史と豊富な湯量をもつ浜村温泉・勝見温泉周辺は、地域の人々から愛される場所になっています。

日光地区にある亀井茲矩が干拓した日光池は、現在は水田となっており、特別天然記念物コウノトリの餌場ともなっています。しかし、冬期には後に設置された水門を閉じることにより再び池となり、ヘラサギやマナヅル、ハクチョウなどの多種な水鳥の越冬地になっており、鷺の湯伝説にある水鳥の憩う湿地帯の風景を思い起こさせます。

日光池周辺では、江戸時代初期に亀井茲矩が朱印船貿易により東南アジアから持ち帰ったことで始まった生姜(しょうが)の栽培が行われており、杉谷神社のそばには収穫された生姜を貯蔵し熟成させるための「生姜穴」と呼ばれる横穴が見られます。

● 魚見台からの眺望

● 人工巣塔に営巣するコウノトリ
写真提供:椿壽幸



33. 鷺の湯伝説と貝がら節　ストーリーマップ

日光地区の生姜の貯蔵穴

冬の日光池

勝見薬師堂

＜コラム＞　貝殻節

江戸時代以降、日本海沿岸にイタヤ（板屋）貝が周期的に大量発生した時期があり、そのイタヤ貝の採取時の労働歌として歌われていたものが「貝殻節」で、各所で独自の発展により節回しが異なりますが、鳥取市内の沿岸部一円に伝わっています。

また採取されたイタヤ貝は、廻船問屋がそれまで肥料用だったものを乾燥させて食用とし、長崎から中国へ輸出し利益を上げました。

貝殻節歌詞　何の因果で　貝殻漕ぎなろうた
カワイヤノー　カワイヤノー

色は黒うなる　身はやせる
ヤサ　ホーエーヤ　ホーエヤエーエ　ヨイヤサノサッサ
ヤンサノエーエ　ヨイヤサノサッサ

貝殻節歌碑（魚見台）

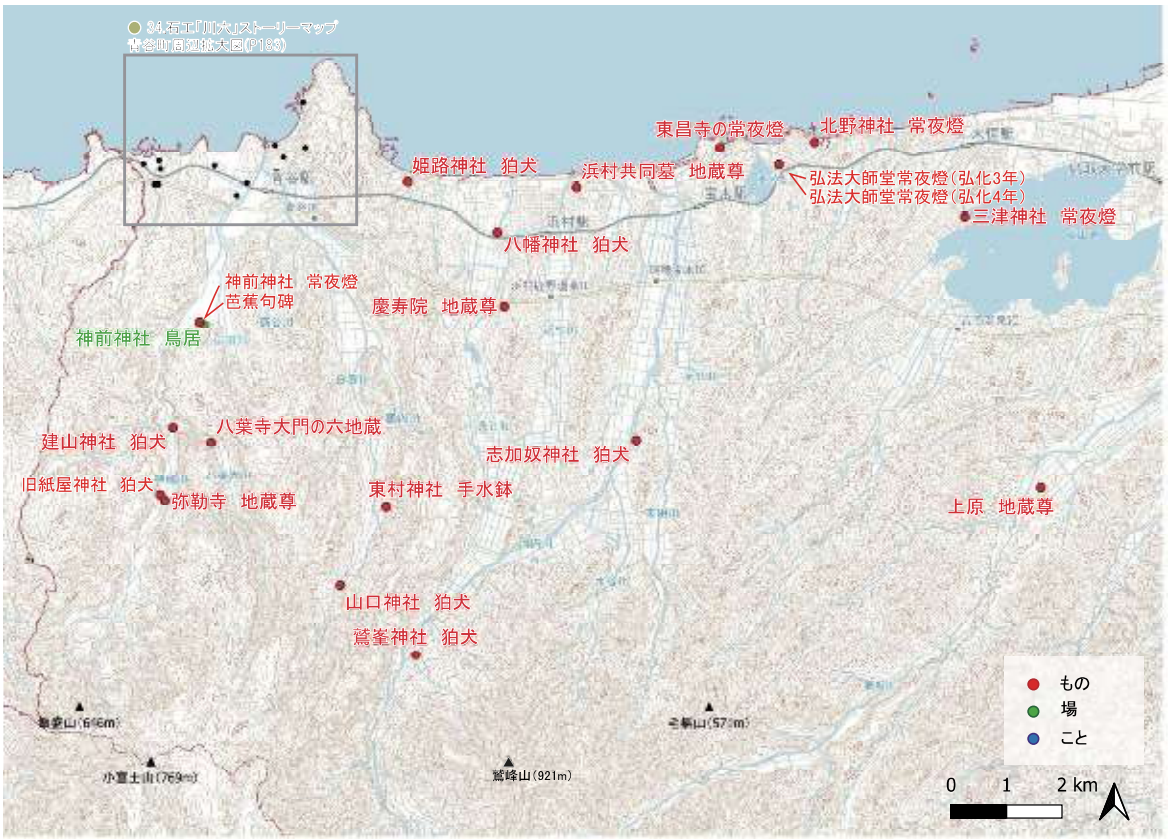
34. 石工「川六」

幕末の因幡国気多郡を中心に優れた石造作品を制作した石工・尾崎六郎兵衛は、作品に「川六」や「河六」等の銘を刻んでいることから、地元の人々は愛着を持って「かわろく」と呼んでいます。川六は因幡国気多郡北河原村の出身で生年は不明ですが、没年は「北河原中興寺過去帳」によると明治維新直前の元治２年(1865)12月11日で、戒名は「鑿巌良巧信士」となっており、名石工であったことがしのばれます。川六が石工として活躍した時期は、天保２年(1831)から元治元年(1864)までの33年間にわたり、その作品は気多郡を中心に、東は湖山池周辺、西は河村郡泊村(現東伯郡湯梨浜町)まで分布し、狛犬をはじめ、常夜燈（灯籠を含む)、地蔵尊、手水鉢、鳥居、石垣、句碑、題目塔、彰徳碑等多岐にわたります。

長和瀬神社の今にも飛び掛かってきそうな狛犬から、鷲峯神社のユーモラスな狛犬まで、表現力豊かな作品は見るものに感動を与えてくれます。

また、江戸時代に山陰地方に甘藷（サツマイモ）を導入し、飢餓から多くの人々の命を救ったことから芋代官といわれる井戸平左衛門正明（石見国大森銀山の代官）の遺徳をたたえ、青谷の人々によって建立された甘藷代官彰徳碑（芋塚）も川六の作品です。

● 鷲峯神社　狛犬　　写真提供：鳥取市あおや郷土館



● 34. 石工「川六」ストーリーマップ：①広域図

● 甘藷代官彰徳碑（芋塚）（市保護文化財）

● 長和瀬神社　狛犬

写真提供：鳥取市あおや郷土館

● 相屋神社　鳥居

● 34. 石工「川六」ストーリーマップ②：青谷町周辺拡大図

＜コラム＞　石造物の地域的特徴

川六の作品のうち、長和瀬神社拝殿の拝み台石と金毘羅燈籠は、この地域に多く見られる特徴的な石造物です。

気高郡を中心に見られる拝み台石は、扇形をしており扇石とも呼ばれています。扇石をかたどった上面には「奉上」や「奉納」の文字が刻まれ、神社の拝殿前に置かれています。

遠くは用瀬町の三角山神社にも、気多郡の岡木村の人が扇石を奉納しており、気高郡の特徴的な石造物であると考えられています。

また、長和瀬の「伯耆往来旧道　常夜燈」と呼ばれるものは、竿の部分に「金」の文字が刻まれており、海上交通の安全や雨乞い等を祈願する「金毘羅信仰」の対象となっているもので、青谷町を中心に見られる石造物です。

● 拝み台石（長和瀬神社）
写真提供：鳥取市あおや郷土館

● 伯耆往来旧道　常夜燈
写真提供：鳥取市あおや郷土館

第3章